

国際シンポジウム 『画像資料からよみがえる文化遺産』について

はじめに

過去に調査された文化財の記録資料をデータベース化したり、プロジェクターやモニターで映し出して展示に使う事はどこでも当たり前に行われているが、展示に利用しないまでも、少なくとも、過去の資料をコンシューマー用であってもある程度精度の高いスキャナーで取り込んで自分のパソコンで使う程度ならば、時間さえあれば個人的な作業の部類として今では扱われているだろう。

文化財を活用するという現在進行形のテーマにおいて、資料のデジタル化は極めて重要な位置を占める、と考えられているし、実際その通りであろう。しかしながら、大々的に喧伝されるのはこのような地道な作業ではなく、矢継ぎ早に打ち出される巨大で高価なハードばかりである状況は、いったいいつになったら解消されるのだろうか？

こうした疑問を常日頃抱いているのは、実際に資料を扱っている専門家の側にはより多いと考えられる。資料のデジタル化を産業界や工学系の政治力で語るよりも、文化財の現場の認識から組み立てていくこと。この視点にたった「技術」や「知恵」について議論が行われる場合は、実は多いようで多くはないのではないかと。

筆者はこうした考えから、平成11年度以来『劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究』というプロジェクトにかかわってきた。このプロジェクトに取り組んだ当初、いわゆる「古写真」に関する扱いは極めて作家的・芸術性が高かったり、珍奇なものに集中している状況が散見され、先行する歴史系の専門家による研究活動が行われてはいるものの、いまだ「手」のついていない領域が極めて多いという事に気がついた。文化財に関わる記録画像資料は実際の我々がそうであるように、写真家が撮影してきたものばかりではない。むしろ、そうでないほうが殆どだろう。今では名前もわからなくなった専門家による記録写真は、専門家の眼を通して見た文化財の重要な情報であり、また、後からみれば資料写真の視覚的な面白さをもさまざまな所で見出す事ができるのだ。

プロジェクトでは、まず地域社会に埋もれているこの画像資料を掘り起こし、そしてこの資料を活用する方法を考えてみる事からスタートした。過去この視点から3度のシンポジウムを開催し、そして今回、「では、具体的にこれら資料はどう活用できるか？」をテーマにしたシンポジウム『画像資料からよみがえる文化遺産』を開催した。

シンポジウムについて

文化遺産の消失が最も端的・劇的にあらわれるのは戦争・災害といった出来事においてであり、そしてこの事は、特に21世紀になってもなお、極めて先鋭な視覚的形態をもって我々の目の前に現れた。パーミヤーン大仏の破壊、そしてアメリカという国家において文化遺産に近い象徴性を持ったワールド・トレーディング・センターの破壊がそれである。

この企画は日本ユネスコ協会連盟をはじめ、全日本博物館学会、全国大学博物館学講座協議会、日本文化財科学会、日本考古学協会、文化財保存修復学会の後援を受け、2002年11月30日に東京渋谷の國學院大學百周年記念館で行った。

樋口隆康氏(奈良県立橿原考古学研究所)の講演は「パーミヤーンの破壊と保存」と題し、自身が調査を陣頭指揮したアフガニスタンのパーミヤーンを中心とする遺跡の重要性について述べ、タリバン以降、壊滅状態となった遺跡をさまざまな方法で復元していくに際して、過去の調査で記録された